

【別冊資料】

明日のとやま教育創造懇話会 報告

資 料 編

- 1 「具体的な方策」に関連する主な意見のまとめ
- 2 数表編（富山県の教育をとりまく状況）

【1 「具体的な方策」に関連する主な意見のまとめ】

観点1 変化する社会に果敢にチャレンジし、生き抜いていく確かな力を育てる

提案1 チャレンジ精神を持って未来を切り拓く、力強い人間を育てる

委員の主な意見

将来に向けての夢や目標をしっかり持っていない子ども、チャレンジ精神が足りない子どもが増えている点は非常に気になる点である。

最近の若者は、力強さ、チャレンジ精神が足りない。力強い生徒・人間を育てることが大変重要である。

高校や大学だけでなく、小中学校段階においても切磋琢磨ということが大切である。

最近の若者は、体力、創造力、コミュニケーション能力のなさが目立つ。

ストレスを感じずに生きていくことは難しい。ストレスをリカバリーしていく能力を身につけたら、今の子どもたちはもう少し生きやすくなる。

どうすれば相手に自分のことが分かってもらえるか、どうすれば相手から自分が聞きたいことを聞き出すことができるか。「コミュニケーション」を一つの学問、教科として学ぶ必要がある。

知性と感性のバランスが崩れ、喜怒哀楽を表現できない子どもや、他人の気持ちが分からない子どもが増えている。感性の育成が必要である。

コミュニケーションには、「話す力」だけでなく「聞く力」も大事である。

知性、感性、道徳性、社会性、さらには体力、気力、そうした全ての領域のバランスをとった教育を進めることが重要である。

全国調査では、海・山・川で遊んだ経験が全国を下回っている。子どもたちの自然体験を増やすような施策が必要である。

自然体験や農山村留学体験で、自然とふれあうことが大切である。

子どもが、たくましさや社会性、礼儀などを身に付けていくうえで、「14歳の挑戦」のような体験活動は有効である。

企業の立場から「14歳の挑戦」、インターンシップに協力しているが、子どもたちが実体験を通して、将来の自分を見つけてくれればよいと思う。

提案2 ふるさとに誇りと愛着を持った国際人を育てる

委員の主な意見

社会がグローバル化すればするほど、自分の原点、アイデンティティがしっかりとあり、ふるさとに誇りを持つことがあってはじめて、真の国際人になれるという意見がある。高校生も自分のふるさと、日本の歴史について、改めて学ぶ必要がある。

ふるさとに愛着、誇りを持つような、ふるさとの歴史を学ぶ取組みは大事である。高校生では、日本全体を俯瞰し、ふるさとの先人の活躍を学ぶことでチャレンジ精神等も取り戻せるのではないかと。受験というものも視野に入れながら、負担が少ない、無理のない形で、日本史を学ぶ機会

を高校生に提供しようと考えてほしい。

グローバル化が進む中、「世界に羽ばたき」活躍する人材の育成という理念は大切である。ただし、何処で活躍していてもふるさと富山を思い、何処に行ってもふるさと富山を忘れないように、郷土愛をはぐくむ教育が重要である。

これからの国際社会で生きていくには、自己表現力やまわりの人との協調性、聞く力や話す力が非常に大切で、いろいろなところと関わっていく姿勢が大切である。

新学習指導要領では、小学校5・6年生に外国語教育を行うことになっているが、これをどうするかは非常に大きな課題である。地域との連携が必要となると思われる。

提案3 社会の変化に対応できる能力を育成する

理科の専科教員により、観察・実験の準備に時間をかけ、丁寧な授業が行われることにより、生徒も意欲的に学習に取り組むことができる。

理科離れの指摘を踏まえ、新学習指導要領では理数教育の充実が掲げられている。

卓越した能力を伸ばすために、理数オリンピックといったものを開催してはどうか。

理数能力の伸長や、情報リテラシー、情報モラル教育、自然に対する感受性やいのちの尊重、を養う環境教育は、今の社会においては極めて重要である。

家庭と学校が連携協力しながら、情報モラルの育成や、インターネット犯罪や有害情報に関する知識の習得等について指導していく必要がある。

情報関連企業の協力を受け、保護者にインターネット利用の正しい知識を実践的に指導したり、啓発したりする活動が、大変効果的であり、そうした取組みを支援してほしい。

子どもの携帯電話の使用について、もう少し踏み込んだ規制ができないか。

「情報教育」、「安全教育」、「環境教育」は、これから重要となる教育分野である。

教育の場では、豊かな自然を生かし、海・山・川で遊ぶような機会を子どもたちに与えることが必要である。

観点2 優れた知性、豊かな心、たくましい体を持った「元気とやまっ子」を育てる

提案4 基礎的な学力と活用力をバランスよく伸ばす

委員の主な意見

子ども自ら学ぶ力（自学自習の力）が失われてきており、自ら人生を切り拓く力が弱まっていることが懸念される。

学力の向上には、学習意欲を持たせることが非常に重要である。日本社会が成熟したために、子どもに学習意欲を持たせることが課題となっている。

子どもたちに学習意欲を持たせるには、褒めるなどして、子どもをその気にさせることが大切である。

「子ども一人ひとりの個性を最大限に生かしのばす」ということも大切な視点である。

今回の全国学力調査はよい結果であったが、データを見ると僅差であり、教育環境を整えることをやめると、子どもたちの状況はいくらでも変化する危険性がある。

学力について子どもたちの個人差が大きくなっている。

新たに配置された小学校専科教員により、専門的で丁寧な授業が行われている。また、担任以外の先生が入ることで、子どもたちはほどよい緊張感をもって授業を受けている。

中学校で36人以上の学級の指導というものは、限界があるのではないか。

中学校になると「勉強が好き」という子どもが急減する。子ども一人一人がわかる授業を行うため、中学校における指導体制の充実が必要である。

学習内容は小学校から中学校になって難しくなる。それに伴い、指導体制も見直す点がある。習熟度別の少人数指導は、わかる喜び、学ぶ楽しさに効果的である。少人数指導又は少人数学級合わせての取組みを進めていただきたい。

学習内容の増加などがある中で、「中1ギャップ」にきめ細かく対応するには「時間の問題」がある。中1学級支援事業を発展させ、先生が生徒に向き合える時間、生徒同士が学び合える時間をさらに確保・充実してほしい。

小規模校にも中1学級支援事業を進めてほしい。小規模校への学級支援が不足しているのではないか。

新学習指導要領では授業時数が増えるが、中学校教員は現状でもかなりの負担があることから、責任ある役割を担える正規の教員を増やす必要がある。中学1年生でも少人数学級の実現が必要ではないか。

少人数学級と少人数指導というものがあって、それぞれに良さや効果がある。そこをしっかりと見極めた上で、それぞれの学校の実情に合わせて、適宜対応すべきである。

少人数学級か少人数指導かは、教科の特性、学校施設、生徒指導の状況等も踏まえ、それぞれの学校の状況に合わせたほうがよい。生徒にとって、学校現場にとって効果のある配置が望ましい。

少人数教育は重視しなければならないが、学校現場の実情に応じたフレキシブルな対応が大事である。

小学校専科教員と中1学級支援講師は大変効果的である。これらを拡充するとともに、中1学級支援講師については、市町村や校長の判断で少人数指導か35人以下の少人数学級のいずれかを選択できるような柔軟な仕組みを構築していただきたい。

家庭学習がなかなか定着していないため、それを進める取組みも必要である。

小さいころの基礎的な力は、家庭での反復練習で身に付く。家庭での学習習慣が定着していくため、学校が成長段階に応じた適切な宿題等の課題を与えることが大切である。

富山県は生涯学習の先進県であるが、「生涯にわたって学び続けていく力」ということも大事である。

提案5 全ての子どもが高い規範意識と社会性、規則正しい生活習慣を身につける

委員の主な意見

知性、感性にかかわる心を育てる教育と、道徳、社会性にかかわる「形を整え心を導く」指導といった心の教育にもっとウエイトを置いていく必要がある。

「子どものしつけは9つ(9歳)までに」といわれている。親がしつけや我慢を教える必要がある。

子どもたちに我慢強さが足りなくなっている。幼児期から一定時間じっと「聞く力」「考える力」などを身に付けさせることが重要である。

子どもたちの集中力が夕方頃から出てくるようになってきている。早寝・早起きなど生活習慣を身に付けさせるための家庭環境が大切である。

親は、子どもとしっかりと向き合い、日々の生活の中で、誉める、励ます、叱るなど親としての責任を果たすことが大切である。

ラジオ体操の推進などにより、早寝、早起きなど基本的な生活習慣を身につけるということでは、大変大事なことである。

心の問題に関しては、やはり心の育成、道徳ということが大事である。思いやりや、やさしさなどが欠如してきているから、物事がおかしくなってくるのではないか。

子どもが学校や家庭だけでなく、第3の場(地域)で自分の活躍の場を持つことは大切である。その際、異世代の交流も期待できる。

提案6 いじめ・不登校など、子どもたちの心の問題の解決に全力で取り組む

委員の主な意見

教員の資質として、子どもの違いを見抜く目が必要である。また、子どもが何でも言える雰囲気醸成していく必要がある。

不登校の生徒は卒業後も半分以上が支援を求めている。早期のいじめ・不登校対策は、当事者の将来の不調に対する予防になるだけでなく、周囲の者に対する安心にもつながり有効である。

スクールカウンセラーの全中学校への配置は、成果が上がっている。悪循環を断ち、二次的な問題を予防する上で、早い時期の手だてとして小学校にスクールカウンセラーを配置する必要がある。

高校生の心の問題は、件数は減少するが重度化、潜在化、複雑化しており、学校も親も対応に苦慮している。スクールカウンセラー等の心の専門家による支援の拡充が必要。

高校においても不登校は多く、また発達障害の生徒も増えており、教師への支援が十分とはいえない状況がある。

新しい「いじめ」として、携帯やメール、ブログによるいじめがある。その抑制への取り組みが必要である。

新学習指導要領では授業時数が増えるが、中学校教員は現状でもかなりの負担があることから、責任ある役割を担える正規の教員を増やす必要がある。中学1年生でも少人数学級の実現が必要ではないか。

学習内容の増加などがある中で、中1ギャップにきめ細かい対応をするには「時間の問題」がある。

いじめ・不登校問題の解決には、家庭の役割が重要である。協力を得られない家庭に対しては、学校だけでなく、地域等周りからの働きかけが必要である。

「気がかりな家庭」へのアプローチは大変難しい。地域全体をサポートする中で、そのような家庭もサポートされていく形がよい。

提案7 命を尊び、心を磨き、身体を鍛える教育を進める

委員の主な意見

動植物を育てたりして、愛情・思いやりの心を小さい時から育成することが大事である。

「いのちの教育」について、学校で親子が話すきっかけを作ってほしいと思う。

言語教育の面からだけでなく、心を育てるという意味からも、読書活動を推進していくことが大切である。

大人がつくった豊かな環境、便利な環境が、子どもの体力や忍耐力、それから小さなハードルや薄い壁を乗り越える力を、奪ってきたと考えられる。子どもたちに試練をつくっていかねばならない。

全国調査では、海・山・川で遊んだ経験が全国を下回っている。子どもたちの自然体験を増やすような施策が必要である。

今回の全国学力調査には「14歳の挑戦」に取り組んできた効果が見られる。地域、社会と協力して、学校や家庭では教えられない経験を積んでいくことは大切なことである。

たくましい体をつくることと、心を豊かにすることは関係している。子どもたちがスポーツや遊びを通して気軽に体力をつけることができるようにする必要がある。

運動・スポーツの楽しさを実感できるよう、放課後等に屋外での遊びやスポーツができる場を設ける必要がある。

スポーツあるいは部活動などの課外活動は、教育には大事である。

子どもたちの1日に歩く歩数が減ってきている。子どもたちがもっと歩いたり走ったりして体力が向上するように、大人も含めた県民運動を考える必要がある。

トップアスリートを育てることは大切である。身近にプロやトップがいるということで、頑張る子供が増えると思う。

子どもたちの健康にとって、スポーツとともに食育も併せてしっかりと取り組んでいくことが大切である。

観点3 家庭、学校、地域の教育力を結集し、子どもの教育環境づくりを進める

提案8 親の学びを応援し、家庭の教育力を高める

委員の主な意見

子どもたちは親の背中を見て育つ。家庭の教育力を高めることが大切である。

家庭で子どもと向き合う時間が短くても、そこで濃密な時間を過ごし、親の本当の愛情をしっかりと示すことが大事である。また、子どもが良い刺激を受けて成長するよう、頑張っている親の背中を見せることも大事である。

今の親には、「先生を尊敬する」とか「礼を大事にする」という人間が持つ基本的な部分が欠

落している。「親を学ぶ」場が必要である。

現代でも3世代同居は大事であり、高齢者も増えている中で、子育ての先輩である祖父母の協力が大切である。

家庭教育の問題は、意識の高い人間ばかりを対象にするのではなく、自覚を持った人間を一人でも増やし、裾野を広げることが大切である。

子どもを取り巻く教育課題に対応していくには、学校と家庭の連携が大切であり、その際、PTAの役割は重要である。

「親を学び伝える学習プログラム」は、楽しみながら親を学べるので良い。また、学級懇談会の日を利用して普及講座を行うのは良い試みである。

学校での授業参観や懇談会の際、保護者が家庭での教育や親学びについて学習できる時間を持てればよい。

県の「親を学び伝える学習プログラム」等の取り組みについて、これからも努力しなければならない。

企業においては、家庭教育を充実させるという意味でのワーク・ライフ・バランスが重要と考えられてきており、育児休業への取組みや、企業に家庭教育アドバイザーを呼ぶなどの活動を県と一緒にやって行っている。

台所は、男も女も大人も子どももみんなが協力し、家事、手伝いをとおして家族の絆を深め、命の大切さを学ぶことができる場である。

提案9 家庭、学校、地域、企業が結びつきを強め、地域ぐるみで教育の充実を目指す

委員の主な意見

子どもが学校や家庭だけでなく、第3の場(地域)で自分の活躍の場を持つことは大切である。その際、異世代の交流も期待できる。

公民館活動を含めた地域活動は子どもの成長に役立っている。三世代が集まった活動などをおして、年寄りの生活の知恵を伝え、宗教的情操を醸成することなどに取り組むことも大切である。

地域の良さや伝統を守る活動を通じて、「地域の良さ」を子どもたちに教え、誇りと愛着を生むような活動をしている公民館がある。そうした地域の営みが、子どもたちの課題を解決する上で大事である。

公民館活動等の地域における教育と、学校教育、家庭教育が上手く連携する仕組みを検討する必要がある。

学校教育と社会教育の垣根を取って、総合的に展開していくことが大切である。

昔は、学校は地域のシンボルであり、先生も尊敬されていたが、今日それが崩れてきており、地域、学校、家庭それぞれで繕っていかなければならない。

学校には、もう少し積極的に保護者や地域の人々のサポートを受け入れてもらいたい。

近所のおじいちゃんおばあちゃんたちの中には、孫を見るのに十分な力をもっていて、しかも特技をもっておられる方がいる。学校等を支援する貴重な戦力である。

シニアの人たちの知恵や経験をうまく活かし、次代を担う子どもたちを育成するところでその力を発揮してほしい。

親を家庭に返すことも重要であるが、親を学ぶ取組みが並行してこそ効果が出てくる。

仕事の都合で家庭教育講座に参加できない家庭もある。企業内でも家庭教育講座が実施できるようにしてほしい。

家庭学習がなかなか定着していないため、それを進める取組みも必要である。

地域だけでなく企業も次世代の教育に力を入れていく時代になっている。

親からまず地域活動に参加し、そして子どもたちも一緒に地域活動に参加していく中から、地域とのつながりを持ち、社会の習慣やルールを覚えることにつながっていくのではないかと。

観点4 教育の質を高め、富山ならではの学校づくりを進める

提案10 教員の指導力・人間力を高めるとともに、子どもと向き合う時間を確保する

委員の主な意見

教員一人一人の人間力、教育力が大切であり、どのようにそれを磨いてもらうか、あるいは磨きやすい環境をつくるかということが大事である。

教員の資質として、子どもの違いを見抜く目が必要である。また、子どもが何でも言える雰囲気醸成していく必要がある。

教員の資質向上のための取組みは、小教研、中教研といった教職員の自主的な研修に委ねている面がある。研修活動への支援など、教員の資質向上に支援が必要である。

教員一人一人の指導力、学校全体としての指導力を高めるため、校内研修を充実していくことが重要である。OJTや指導主事の活用などにより、特に若い教員に対する研修を工夫していく必要がある。

教員の資質向上に関し、教員が志と熱意を持って富山の教育に努力できるよう、国内外の教育事情を見るといったチャンスを与えるべきである。

教員がやりがいを持って、尊敬されるような立場で頑張れるように、教員の支援を行っていただきたい。

教員の指導力を高める上で、異校種間の交流、異業種の体験を進める必要がある。

「14歳の挑戦」を実施しているが、先生にも子どもを理解する観点から、ぜひ社会体験を進めてほしい。

大学等との連携について、高専や専門学校などとも連携を深めていくべきである。

教員の資質の向上をはかるには、運動部活動経験者や民間企業経験者などを採用するよう配慮すべきである。また、優れた指導者への褒賞も実施してはどうか。

仕事に悩んでいる教員や子どもと向き合う時間がとれなくなっている教員が増えている。教員には、ストレスをうまく解消できること、強弱をつけた仕事の仕方をするのが求められている。

教員は、学校を取り巻く課題の複雑化、多様化が進み、職務負荷の増大により、子どもと向き合う時間が減少している。教員の事務処理の簡素化やサポートの充実が必要である。

学校現場の忙しさの理由を分析し、無駄なことを省き、合理化できるものは合理化していく努力が必要である。

教員の多忙化は、教員数のこともあるが、使命感によっても実効性が異なるものである。

提案 11 未来を見据えた高校の教育改革を推進する

委員の主な意見

県立高校の小規模化が進む中、生徒が切磋琢磨できる学習環境が失われてきている。

高校再編は必然であり、5年後、10年後の高校生の教育環境を充実させるという観点から、高校の改革を着実に基本計画どおり進める必要がある。

高校全体で調和のとれた全人教育を行うため、高校への財政面での支援が必要である。

私学では、先生の授業がわかりやすいかどうか、無記名で子どもたちにアンケートをとり、学年主任ならびに教頭のところに直接届く形で、教育現場を把握しやすくしている。

県立高校の再編の素案が発表された。その内容には、ものづくり学やコミュニケーション入門、地域の歴史や産業を学ぶといった新しい履修科目が設定されるなど、大変すばらしいと感じた。再編の対象になっている高校だけではなく、全ての県立学校の魅力づくりと、高等教育の振興につなげていっていただきたい。

高校の教育改革は、「ものづくり中核校」に期待している。また、思考力をのばす探究科を複数つくって欲しい。定時制高校の見直しにも、具体的な検討を進めて欲しい。

私学では、0限授業と7限授業や、土曜日学習も行っている場合があり、先生方も子どもたちも相当な負担がかかっている。また、部活動の大会日程なども考えながら学校行事を組んでいかなければならない。

私立高校は、子どもたちに成功体験を味わわせ成長させるため一生懸命頑張っている。私立高校の振興を図るため協力をお願いしたい。

提案 12 信頼される学校づくりを推進する

委員の主な意見

学校は、個々の生徒に直面している教員が信頼され、また、組織としても信頼されなければならない。

昔は、学校は地域のシンボルであり、先生も尊敬されていたが、今日それが崩れてきており、地域、学校、家庭それぞれで繕っていかなければならない。

教員一人一人の指導力、学校全体としての指導力を高めるため、校内研修を充実していくことが重要である。特に若い教員に対する研修を工夫していく必要がある。

「幼保と小の一貫性のある教育」が必要ということを強調したい。

高校と大学の連携（高大連携）や、幼稚園・保育所と小学校の連携（幼保小連携）を進めてほしい。

特別支援学校の就労支援については、就労率が下がっており、通り一遍の対応ではだめである。また、企業経営者の社会貢献ということも必要である。

子どもが安全に生きていけるよう、インターネット等の情報を正しく判断できる力を養うなどの「安全教育」という観点も重要である。

格差社会の進展という観点から、子どもの教育機会の保障ということも重要となっている。

うまく進まなくても再チャレンジすること、みんながそれを応援することも大事。